文化財図録

古代史の遺産

—横芝地方の縄文遺跡と古墳群—

1979

横芝町教育委員会

文化財図録

古代史の遺産

—横芝地方の縄文遺跡と古墳群—

1979

横芝町教育委員会

発刊のことば

横芝町は、姥山・牛熊・鴻ノ巣など貝塚遺跡の多いことで、九十九里地方屈指であるばかりでなく、殿塚・姫塚から出土した埴輪群など、全国的に広く知られているところです。これらの埋蔵文化財は、昭和31年以降、慶応義塾大学・早稲田大学の研究室の方々によって発掘調査され、すぐれた学術的成果をあげて注目されました。

縄文土器・独木舟や埴輪の行列など、はるかな祖先の営みが、数千年の地底での眠りから覚め、続々と私たちの前にその姿を現したのです。そして掘り起こされた地中の遺宝には、原始・古代に生きた人々の稚拙ながらも豊かな感覚と、おおらかな創造力がたくましく表現されています。

町教育委員会は、住民の皆さんに郷土の歴史的風土や文化財を紹介するために、『文化財図録』の編集を進めて参りましたが、このほど、その第一集として埋蔵文化財を中心とした「古代史の遺産」を公刊することになりました。この図録が、郷土の古代史探訪へのいざないとなり、文化財の保護と活用への一里塚ともなれば、明るく豊かな由緒ある郷土づくりの使命を担う私共にとりまして、これに過ぎる喜びはありません。

終りに、本図録作成のために御努力を賜りました皆様に深甚なる謝意を表します。

昭和54年5月5日

横芝町教育委員会

教育長　小　高　猶　次

目　次

発刊のことば（小高猶次）
房総古代史の概観…… 1
考古学資料の保存と郷土学習（山辺百代）… 2
横芝地方の古代史年表…… 3
古代遺跡の発掘調査…… 4
出土遺物集成　先縄文時代の石器…… 5
縄文土器…… 6
縄文期の石器…… 8
房総地方の主要貝塚…… 9
土偶……10
装身具……11
骨角器……12
独木舟……13
埴輪……14
房総地方の主要古墳と国造…17
須恵器……19
横芝地方の縄文遺跡と古墳群
Ⅰ　**古代遺跡の概観**……20
自然的環境
貝塚と古墳群
Ⅱ　**縄文人の食生活**……21
郷土の縄文遺跡
貝塚の遺跡と遺物
縄文人の食糧
縄文土器と食生活
Ⅲ　**殿塚・姫塚の遺産**……26
古墳文化の開幕
埴輪芸術の誕生
武社の国造
参考文献……29
あとがき（伊藤一男）……30

房総古代史の概観

―図録の理解を深めるために―

最初の住民　豊かに広がる平野と海、自然の地の利に恵まれた房総半島は、太古の昔から人々の生活が始められ、数多くの古代遺跡が分布しています。この半島は、日本列島の東の果てに位置し、黒潮の北上する太平洋につきでた海岸線は約 370㎞で、北は一面「香取の内海」におおわれていました。私たちの遠い祖先は、氷河期の海面低下によってできた陸橋を渡って、太陸から移住して来ました。これらの人々が「先縄文時代」とよばれる石器文化を創造したのですが、打製石器や骨角器・木器を道具として、狩猟や植物採取を毎日の仕事としていたものと考えられます。

貝塚の形成　およそ１万年以前、日本で土器つくりが始まりました。煮ることによって、植物のデンプン質や繊維質が消化吸収しやすくなり、食べることのできる植物の種類が多くなりました。この時代になると狩猟の方法も、これまでの石槍をつかう方法から弓矢を使用するようになりました。この「飛び道具」で、イノシシやシカ・鳥類などをとっていたと考えられます。また、貝や魚などの海産物をとって食べるようになり、日本各地に貝塚がたくさんつくられました。房総半島は気候温暖で自然の資源に恵まれ、縄文時代には北から南から採取漁撈の民が続々と移り住みました。千葉県内における縄文貝塚の分布は、土器の型式別に分けると約 370もの遺跡があって、日本列島の中で最も密集している地域だといわれます。

農耕の開始　貝塚文化は海退現象など環境の変化によって消滅しましたが、弥生時代の開幕とともに、水稲栽培を中心とした農耕生産が起ります。それと同時に、太陸から鉄器が導入され、この時代を大きく発展させることになりました。『古語拾遺』の阿波忌部（あわのいんべ）伝承にみられるように、房総半島へは黒潮の流れにのって西南地方の人々が移り住み、天富命や多（意富）の氏族などが農耕・開拓に活躍したと伝えられています。

国家の起源　弥生時代に開始された農耕生産は、日本列島の大半に普及し、それによる経済力の上昇が共同体村落の内部に階級性を生み、やがて畿内地方に「大和政権」を誕生させました。これが日本における「国家」としての、統治形態の起源であるといわれています。この時代になると、権力者と一般庶民との間には、生活における格差が大きく開くようになりました。権力者は「豪族」とよばれ、かれらの死後は、高塚式古墳に埋葬されています。従って、この時代の文化を「古墳文化」ともいいます。西暦 645年に始まる「大化改新」は、国家の政治体制の変革だけでなく、地方行政の仕組みをも変えました。房総地方は「総」（ふさ）とよばれ、国郡の制により上総・下総・安房の３国が置れました。各国には政治の中心となる「国府」がつくられ、国分寺なども建設されました。以上、この図録の理解を深めるために、房総古代史の展開を概観してきましたが、読者の方々の手引ともなればと願っています。

特別寄稿

考古学資料の保存と郷土学習

山　辺　百　代（横芝中学校教諭）

わたしたちの生きているこの世の中は、刻一刻と変化しています。時とともに、時代とともに変化する世の中。そして、その世の中をつくる人間。これらを理解するにはどうしたらよいのでしょう。真の姿をとらえるには、変化の仕方をみること、その成立ちを見きわめることが大切です。自らの姿を知るために過去の世界を探ろうとするのです。過去のものごとを確める手がかりは沢山あります。住居の跡から、ことば・習慣など。しかし、その中には残りやすい物とそうでない物とがあり、中央の政治や制度などは前者に、地方の場合は後者になりがちです。わたしたちは日本人であり、この地域の住民であり、他とは違う個性を持つはずです。そこまで理解できたとき、真に豊かな人間像が得られるのではないでしょうか。歴史についても同様であり、わたしたち自身を含めた、真の人間の姿を捉えるためには、郷土史の果す役割は大きいといえましょう。

遠い遠い昔、人々は生きるために精一杯努力をしました。そして生産力を高め集団の輪を広げていきました。部落から小さいながらも国としてのまとまりを持ち、やがて日本列島をひとつにと。約1500年前頃、わたしたちのこの地域も大和朝延の支配下になっています。武社の国造がこの地域の支配者でした。木戸川の流域がその中心となったと考えてよいでしょう。台地が浸蝕谷と別けられようとする近くに17の古墳から成る中台古墳群があります。その中心となるのは殿塚・姫塚の２基の前方後円墳です。殿塚は墳丘の長径86m、高さ８ｍという堂々としたものです。遺体を埋葬した石室からは、ガラス玉や琥珀玉・太刀などが発見され、壁面には朱彩が施されていたということです。このような古墳を何のために造ったのでしょう。なぜこの土地に、どのようにして、また大和朝延との関係は、等々、限りなく疑問が出てきます。そして発掘調査の科学的な結果が、わたしたちの祖先の姿を少しずつ明らかにしてくれるのです。

古墳からは多くの埴輪が出土されています。姫塚には50mにわたる形象埴輪の行列が見られました。動物・男・女と殿塚と同じ配列で並べられていたのです。1500年も昔の人々が考えたり、感じたりしたことは、わたしたちの心の奥底でつながりを持っているのではないでしょうか。埴輪は見る人に何かを語りかけようとしています。

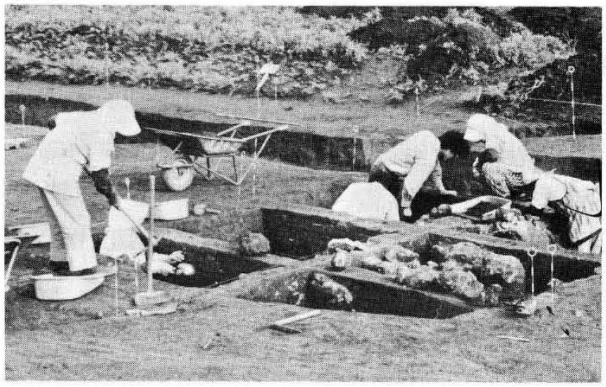
温暖な気候に恵まれたこの地域で、豊かなくらしが約束されたとしたなら、祖先の苦しみや喜び、明日への努力を忘れることはできません。わたしたちにとって、明日を信じられるのは、昨日があったからに相違ありません。1000年・2000年の昔、この地で、わたしたちの祖先は何を考え、どのように生活していたのでしょう。その答えのカギを持つのが、考古学の発掘調査によって得られる科学的な成果なのです。地中ふかく眠っていた「古代史の遺産」を、単なる遺物として見るだけでなく、真に生きた郷土学習の参考資料として保存・活用してゆきたいものであります。

古代遺跡の発掘調査

「考古学」とは、遺跡・遺物に基づいて人類文化の過去を研究する学問であり、18世紀ドイツのウインケルマンによって科学的方法が確立されました。古代遺跡の多くは、丘陵上の地中ふかく埋没しており、その発掘調査は赤土の地肌を削ることから始まります。縄文時代の貝塚や住居の跡は、50cm～１ｍの地中から発見され、土器や骨角器など多くの遺物が出土します。発掘調査の対象は、過去の物質的資料の保存状態、物と物との随伴関係が中心で、その上下関係や形態の相似点・相異点などを詳細に検討して、その遺跡の年代や史的性格などが決定されます。

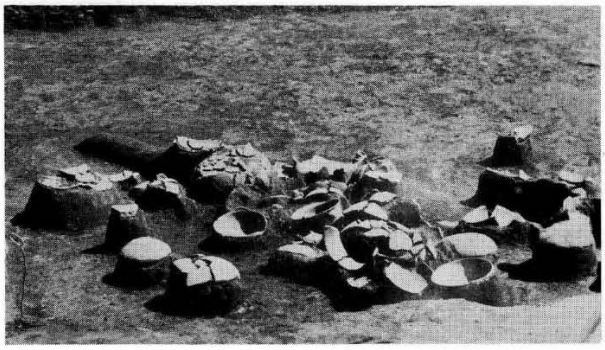
黙々と赤土を削る

縄文時代や古墳時代など、文字のない時代あるいは文献記録のきわめて乏しい時代については、層位学的・型式学的な研究方法が駆使されます。例えば、発掘溝（トレンチ）の側壁土層を精密に区分して、そこから伴出する遺物によって文化的層序が決定されたり、土器なども形態的に細かく型式分類がなされています。



現代に蘇える古代遺跡

また、遺跡から発掘される土器類は、その多くが破片として出土するので、完全な姿に復元する作業も長い時間を必要とします。考古学の研究は、その対象とする時代によって先史考古学・歴史考古学などに区別されますが、ともに遺跡・遺物を中心として人類生活の実際とその発展を明らかにすることを目的としています。



住居跡から出土する土器群

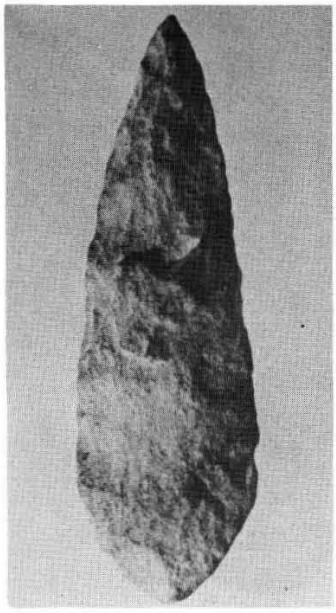
横芝地方の古代史年表

	先土器	・木戸台遺跡
		・中台発見尖頭器
		−9000
	縄文	・**加曽利貝塚**（中期・ＢＣ3000〜2000）
		・中台鴻ノ巣貝塚（中・後）　・中台宮台貝塚（中・後・晩）
−8000		・山武姥山貝塚（中・後・晩）　・遠山貝塚（中・晩）
		・牛熊貝塚（後期・ＢＣ2000〜1000）
		・中台角田貝塚（後）　・木戸台貝塚（後）
		・高谷川遺跡（後）　・横芝駅東方遺跡（後）
	弥生	・中台発見石剣　・新井橋発見弥生土器
		ＢＣ
100		300　・**能満寺古墳**（前期・ＡＤ 100〜 200）
		〈成務期〉彦忍人命が武社国造に任命される（『国造本紀』）
400	古墳	・**伊甚屯倉**（中期・ＡＤ 300〜 500）
		・中台古墳群（殿塚・姫塚・後期・ＡＤ 500〜 600）
		・町原古墳群（後）
		・取立古墳群（後）
		645**大化改新**　647大化三年紀、中臣連押熊（『続日本紀』）
710	奈良	710**奈良遷都**
		769神護慶雲三年紀、春日部奥麻呂、武射臣を賜わる（『続日本紀』）
794	平安	794**平安遷都**
		806長倉大宮創建（社伝）　807牛熊八幡宮創建（社伝）
		875**下総国俘囚反乱**
		879元慶三年紀、右近衛将監武射臣助守（『三代実録』）
		883**上総国市原郡の俘囚反乱**
		935**和名抄完成** —— 武射郡・狎猥郷・長倉郷・理倉郷
		・木戸台遺跡
		939**平将門の乱**
1192		

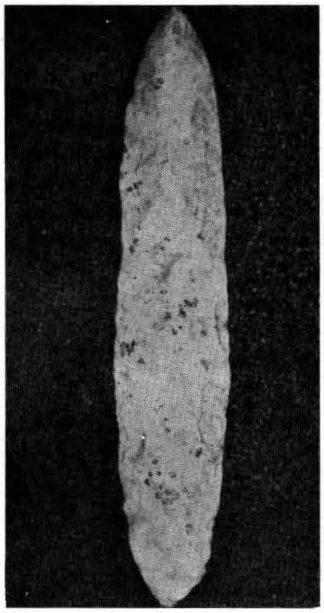
出土遺物集成

先縄文時代の石器

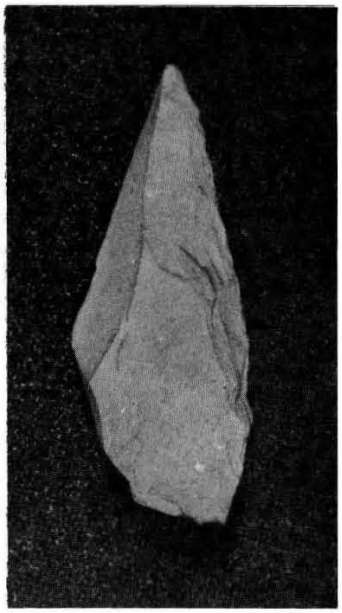
先縄文時代（プレ）とは、縄文時代に先行する日本最古の時代で、当時の人々は、主として打ち欠きによって作られた石器を用い、狩猟と採取によって食料を獲得していました。この時代の遺物は、関東ローム層の赤土の中に包含されており、横芝地方では中台で尖頭器が発見され、最近では木戸台遺跡からナイフ・スクレイパー・尖頭器などの旧石器時代の遺物が出土しています。



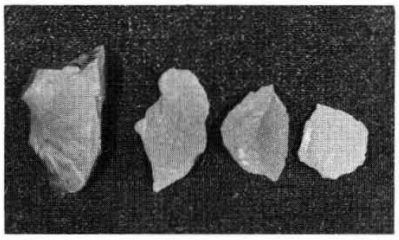
尖頭器（中台大宮神社付近）



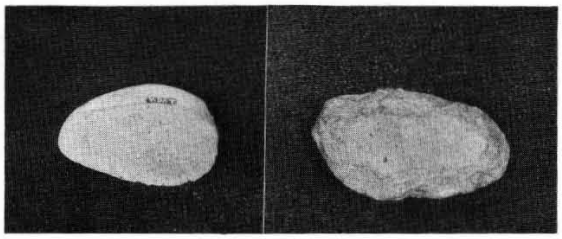
尖頭器（石槍・木戸台遺跡）



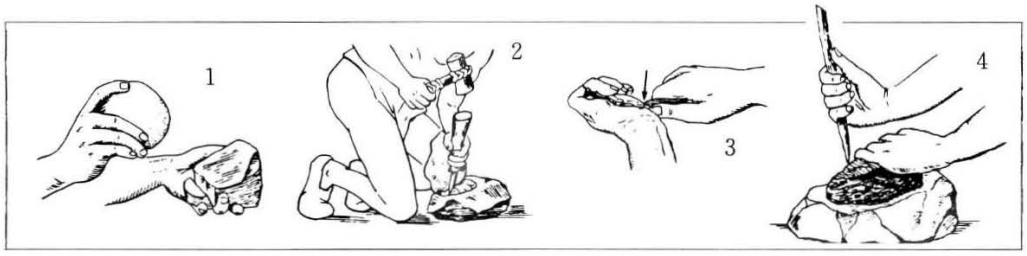
ナイフ形石器（木戸台）



スクレイパー（木戸台）



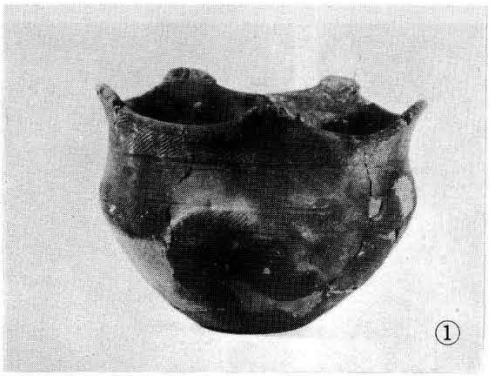
打ち欠きによる石器（木戸台）

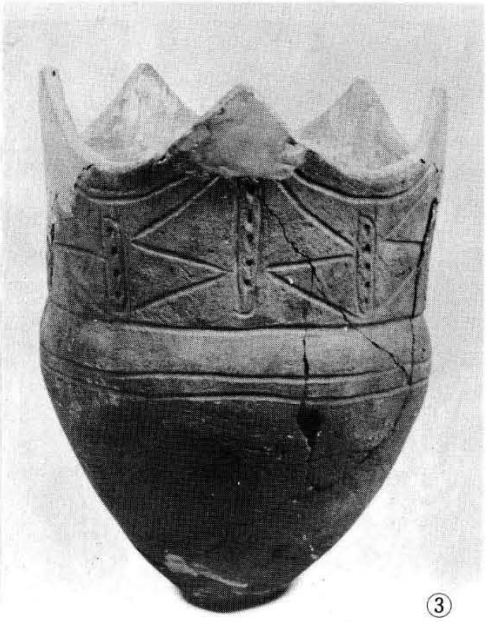


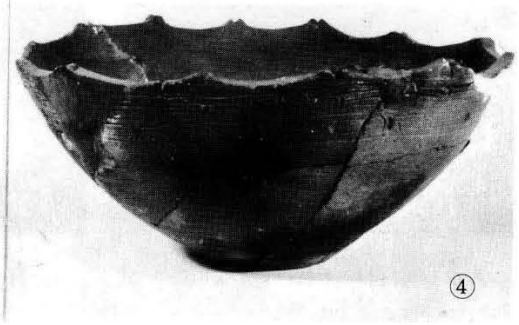
石器の製作法　1直接打法　2間接打法　3押圧剝離　4台石打法　（KPオークリー原図）

縄文土器

はるか１万年前、われわれの祖先は、先史時代では世界で類をみない「縄文土器」を発明しました。姥山貝塚の土器は、粘土の塊を積み重ねた大胆な激しい土器から、線を引き彫り刻む静かな土器への移行期のもので、その繊細・優美な姿には土器に託された縄文人の美的情念が感じられます。







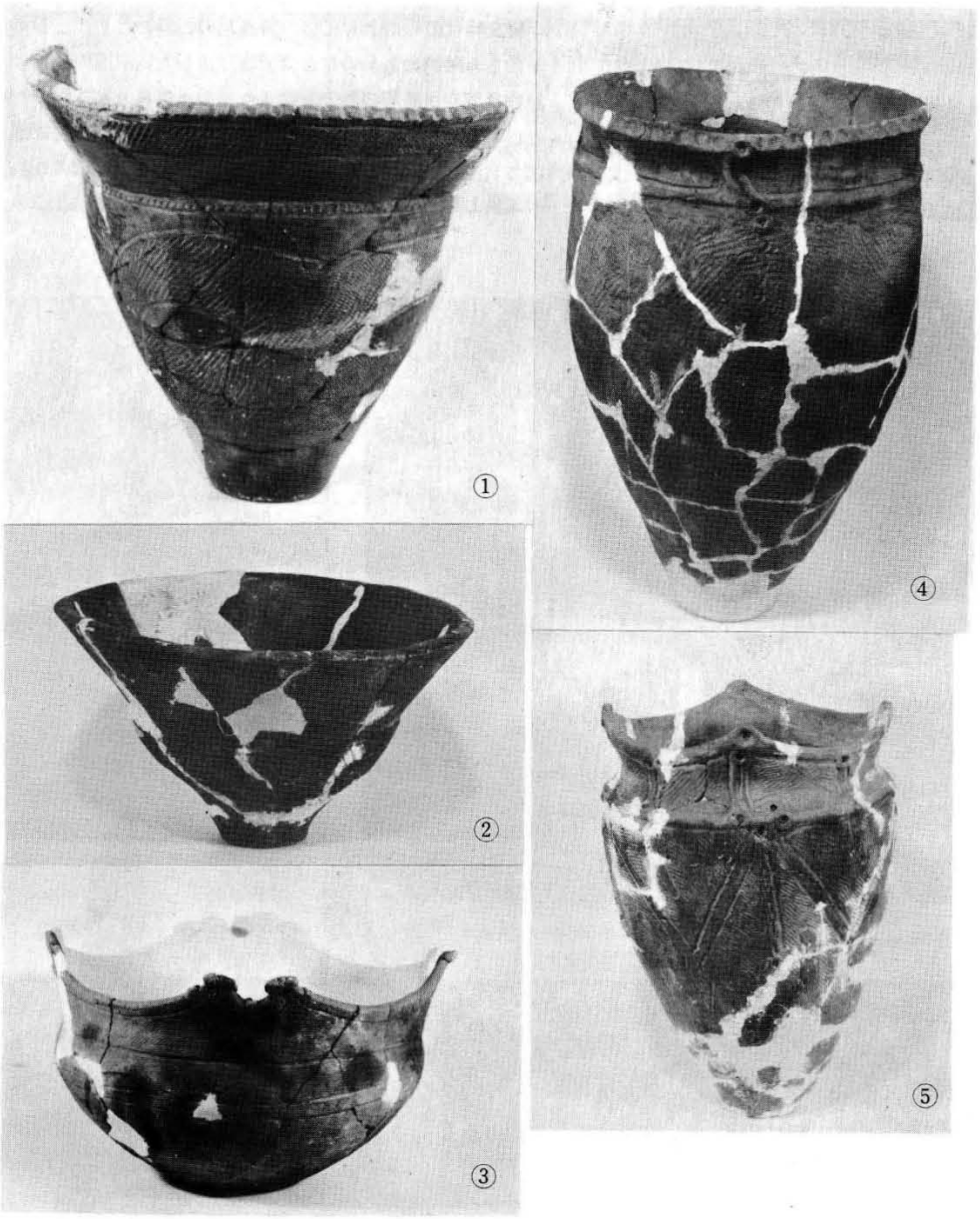
姥山貝塚出土の晩期縄文土器

①浅鉢形土器（姥山Ⅱ式）

②深鉢形土器（姥山Ⅱ式）

③深鉢形土器（姥山Ⅲ式）

④浅鉢形土器（荒海式）



縄文土器の各型式

①加曽利Ｂ式土器（牛熊貝塚）

②加曽利Ｂ式土器（姥山貝塚）

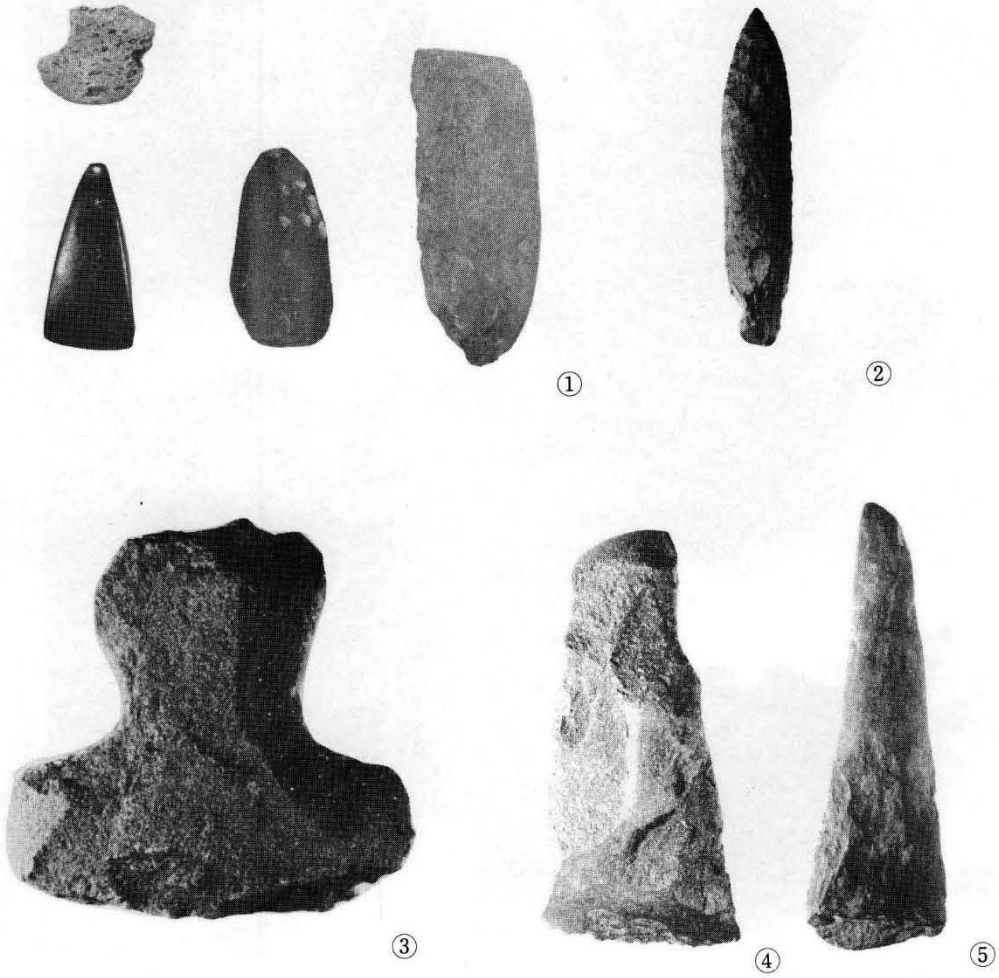
③姥山Ⅱ式土器（姥山貝塚）

④堀之内式土器（鴻ノ巣貝塚）

⑤堀之内式土器（姥山貝塚）

縄文期の石器

縄文時代の石器としては、狩猟用の石鏃とともに、石斧が最も一般的な道具のひとつでありました。打製の石斧は植物採取や住居用の竪穴を掘るための土掘具として用いたといわれ、中期以降、とくに関東・中部地方で爆発的に増加します。また磨製石斧は、樹木の伐採やその処理のための工具として用いたと考えられます。



貝塚出土の石器

①磨製石斧その他（牛熊貝塚）

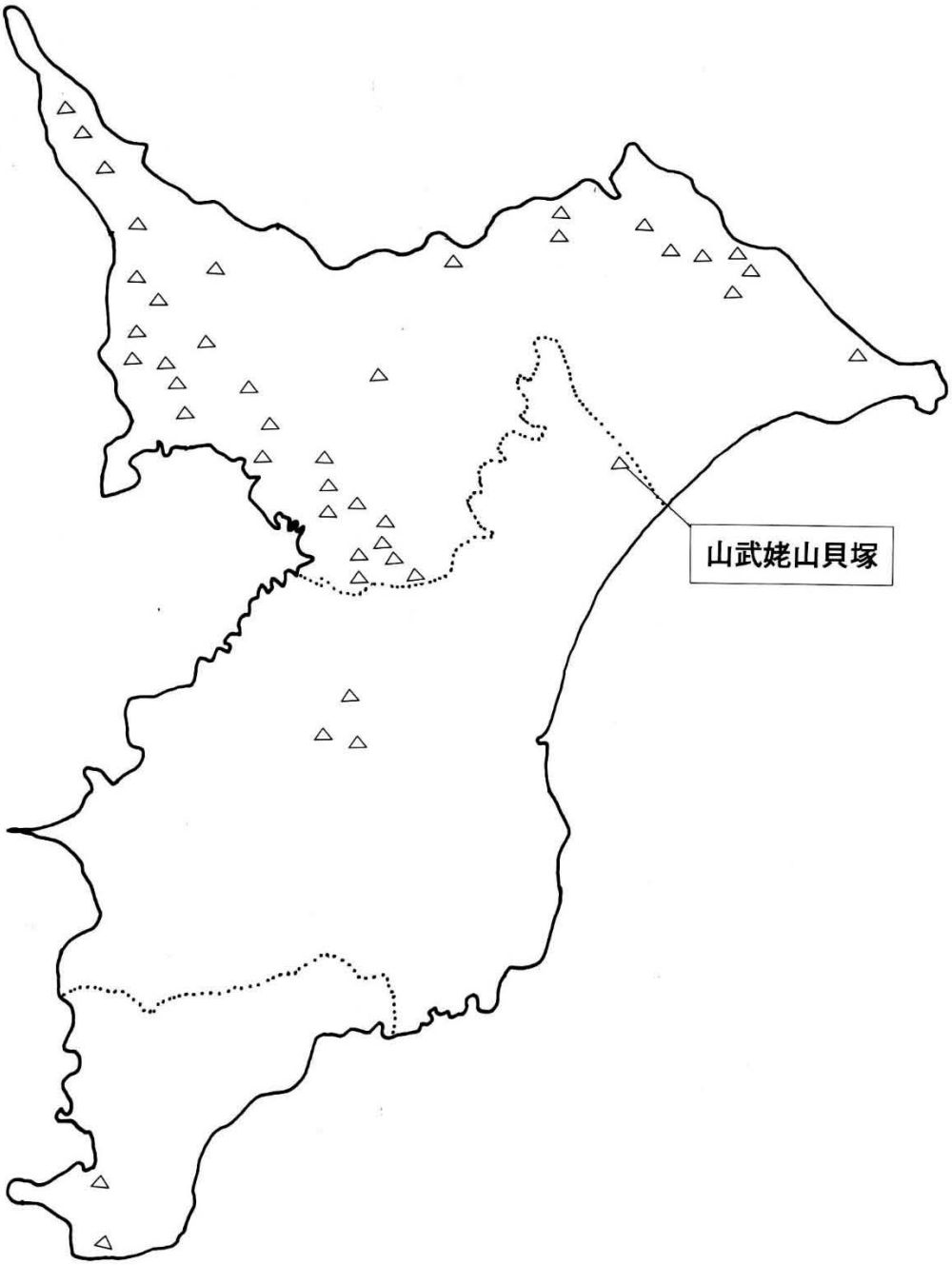
②石槍（姥山貝塚）

③打製石斧（姥山貝塚）

④　同　　（同）

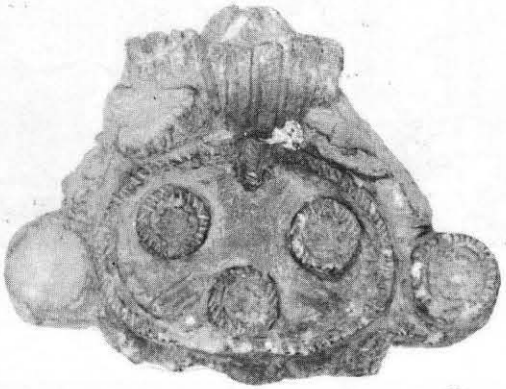
⑤　同　　（同）

房総地方の主要貝塚

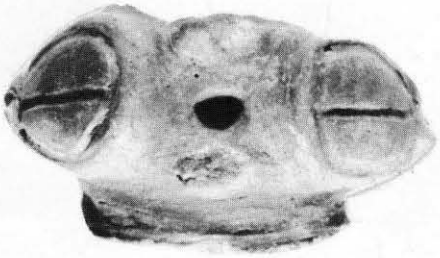


土　　偶

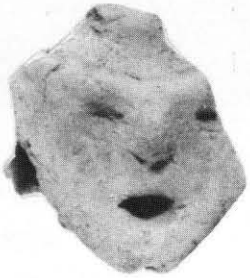
奇妙な表情、豊かな肢体、全身をめぐる抽象化された文様など、貝塚から発掘された土偶からは想像を越えるたくましい情念が読みとれます。姥山から出土した遮光器土偶の頭部など、体の一部を切り欠いだ姿には、狩猟・採取のきびしい環境を生きぬいた古代人の呪術と祭儀のあり方がうかがわれます。（右上は岩手県長倉遺跡の遮光器土偶）



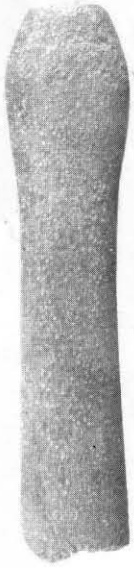
①



②



③

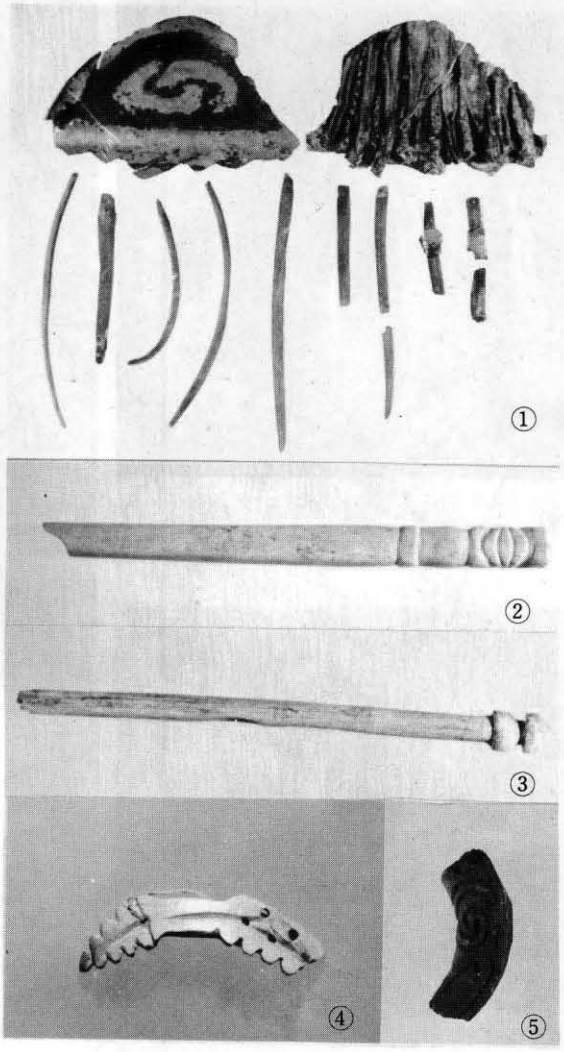


④

①ミミズク土偶片（牛熊貝塚）
②遮光器土偶頭部（姥山貝塚）
③土偶顔面（姥山貝塚）
④石棒片（姥山貝塚）

装　身　具

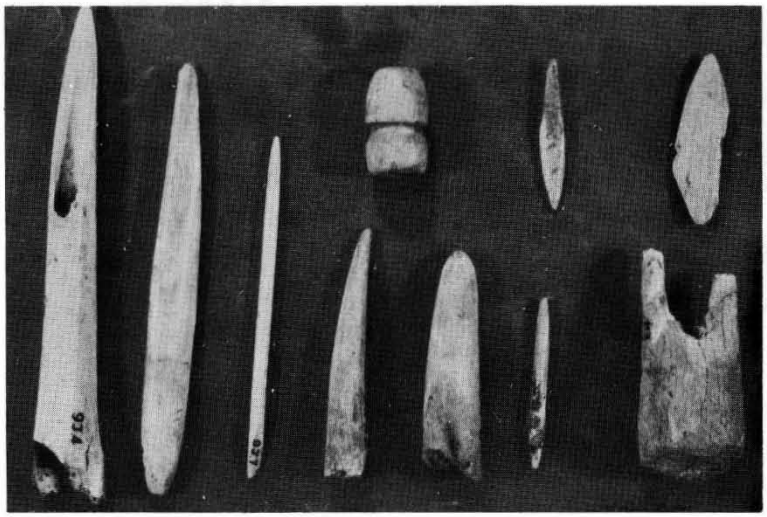
われわれの祖先である縄文人は、石・骨・角などで作られた装飾品を身につけていました。特に高谷川遺跡の竹櫛は逸品ですが、その目的は装飾のためばかりでなく、智恵と経済の発達によって権威のシンボルとなるまでは、邪悪なものを祓い、幸福を願う呪術的シンボルだったのです。



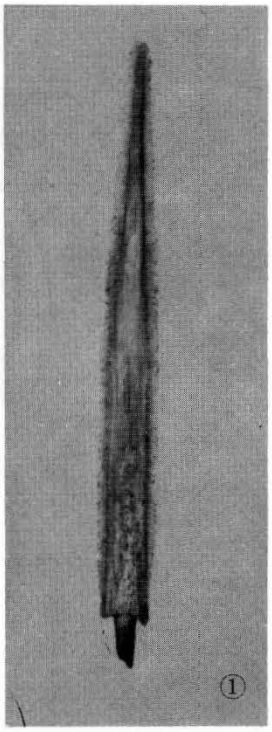
①漆塗櫛（高谷川）
②③骨製エヤピン
（姥山）
④猪牙製飾品具
（姥山）
⑤滑車型耳飾片
（姥山）

骨　角　器

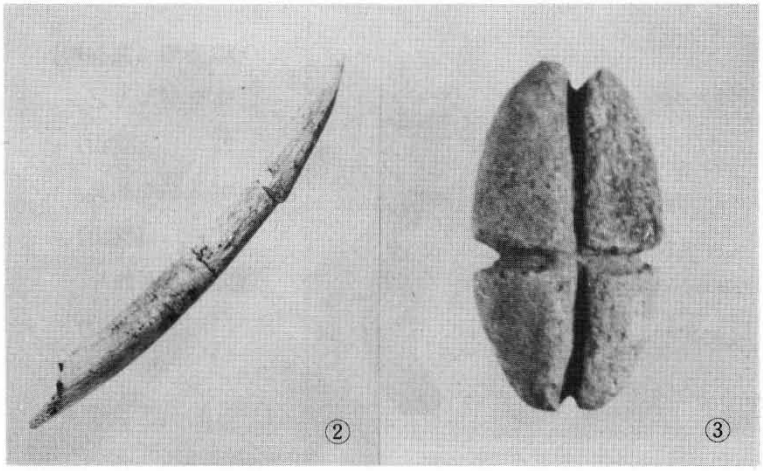
日本列島は周囲を海に囲まれ、その自然の恵みをうけた縄文人は、生産用具のひとつとして魚や獣の骨角を利用することを考案しました。木よりも硬く、石よりも強靭で、組合わせや複雑な加工ができる性質を利用した骨角器は、漁撈具・狩猟具・装身具として多様に用いられました。



各種骨角器（牛熊貝塚）



①



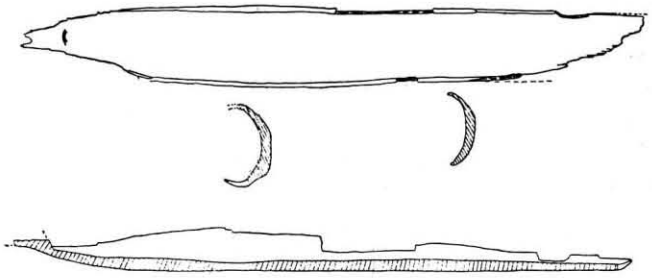
②　③

①エイの刺骨を利用したヤス（姥山貝塚）
②ヤス状骨器（姥山貝塚）
③石錘（姥山貝塚）

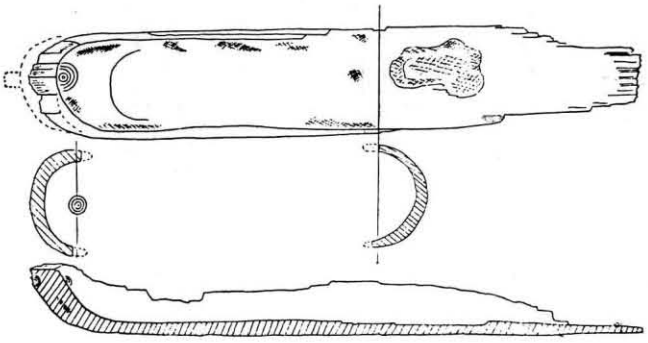
独　木　舟

縄文時代の舟は、大きな樹木を半分に割って、その内部をくりぬいた、いわゆる独木舟（丸木舟）であり、多くは内水面の航行に利用されたと考えられます。横芝地方では高谷川水系を中心に５隻ほど発掘され、また、坂田池からはイヌガヤ製の櫂（かい）が発見されています。

栗山川出土の独木舟



高谷川Ｂ地点出土の独木舟

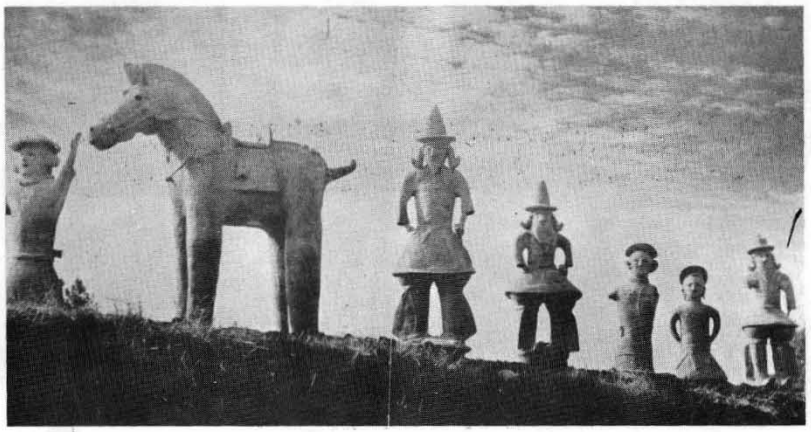


高谷川Ｇ地点出土の独木舟

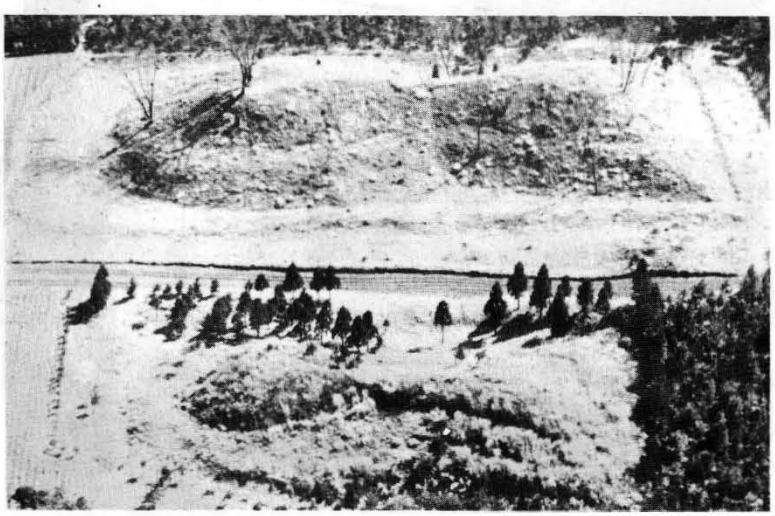
弥生期の磨製石剣
（中台付近出土）

埴　　輪

縄文時代からはるかに時が過ぎた古墳時代、ひとびとは古墳の縁辺に無数の埴輪を並べました。殿塚・姫塚の墳丘から姿を現した家形埴輪や器財埴輪。そして、われわれにもっともなじみの深い動物と人物の埴輪など、かなりバラエティーに富んでいます。その素朴な表情とさまだまな配列の埴輪群から、原始古代の生と死の祭りの声が聞こえてくるようです。



埴輪の行列（姫塚古墳）



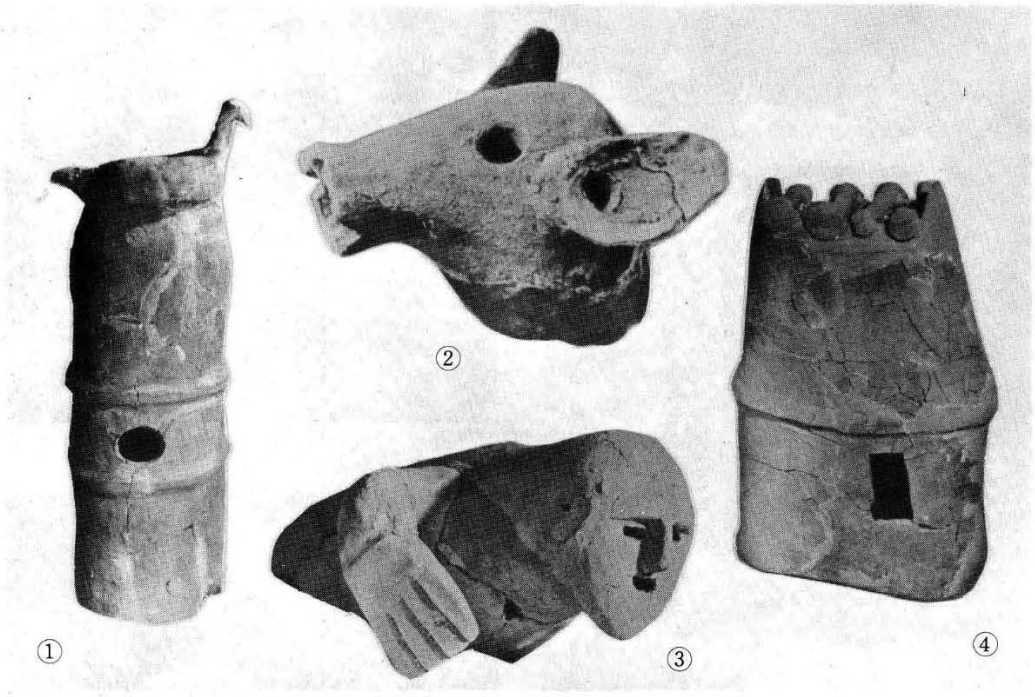
殿塚・姫塚の全景

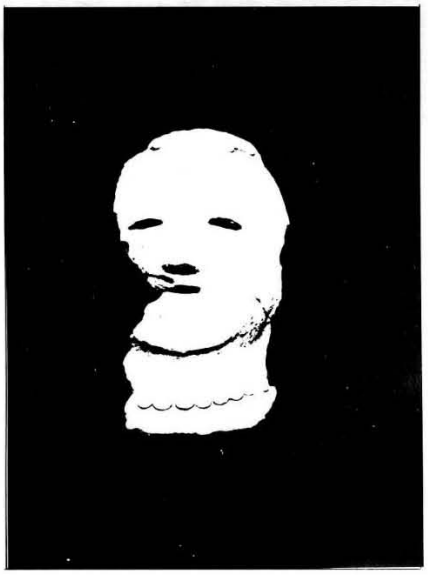
註：芝山古墳群（殿塚・姫塚）関係の図版は下記の文献から引用しました。

①滝口宏・久地岡稼雄編『はにわ』日本経済新聞社・1963

②芝山はにわ博物館編『芝山古墳群―殿塚・姫塚・木戸前１号墳―』Ｓ48.5改訂

③川戸彰他『横芝町史』第１章原始古代の項、Ｓ50.3公刊





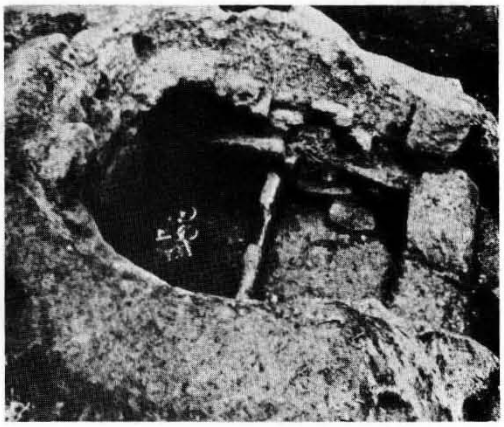
⑤

⑥

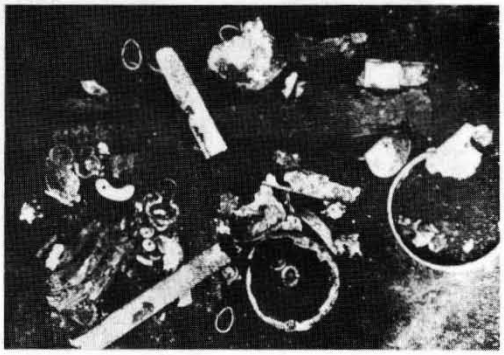
殿塚古墳出土埴輪

①水鳥（動物群）
②犬の首（動物群）
③泳ぐような人物
④四柱造家
⑤女子の面
⑥老人の首（姫塚・県有形文化財）

姫塚石室



殿塚石室



石室内の遺物状況

房総地方の主要古墳群と国造

姫塚古墳出土埴輪

①丈の高い男

②飾り馬

③ひざまずく男

④タスキをかける男

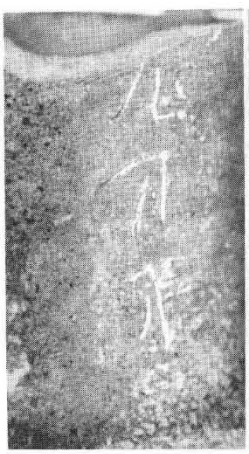
⑤首飾りをする女

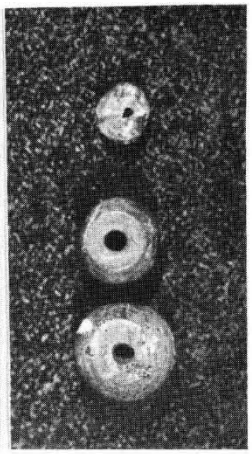
⑥腰にカマを下げている男

須　恵　器

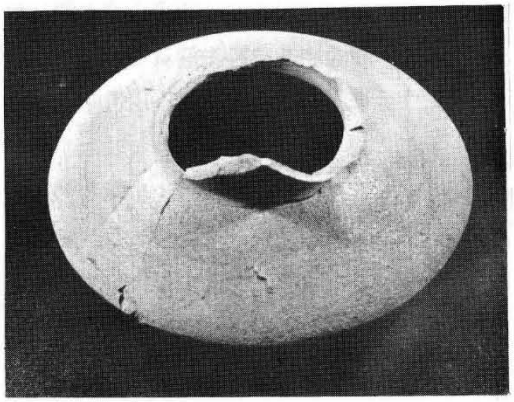
古墳時代の中期以降、伝統的な土師（はじ）器とは色沢も硬度もまったく異なる須恵（すえ）器が朝鮮半島から伝えられ、わが国の陶芸史上に画期的な技術革新をもたらしました。木戸台遺跡から発見された平安時代の長頸ツボには「（山辺）　庄刀部」の陰刻銘が認められ、郷土付近で作られた須恵器であると考えられます。

長頸壺（器高130㎜・頸部径65㎜）

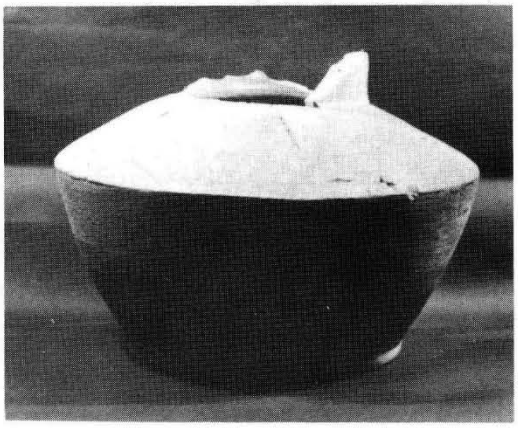




長頸壺銘文と蛇紋岩製玉



広口壺（器高103㎜・底部径137㎜）



広口壺胴部

横芝地方の縄文遺跡と古墳群

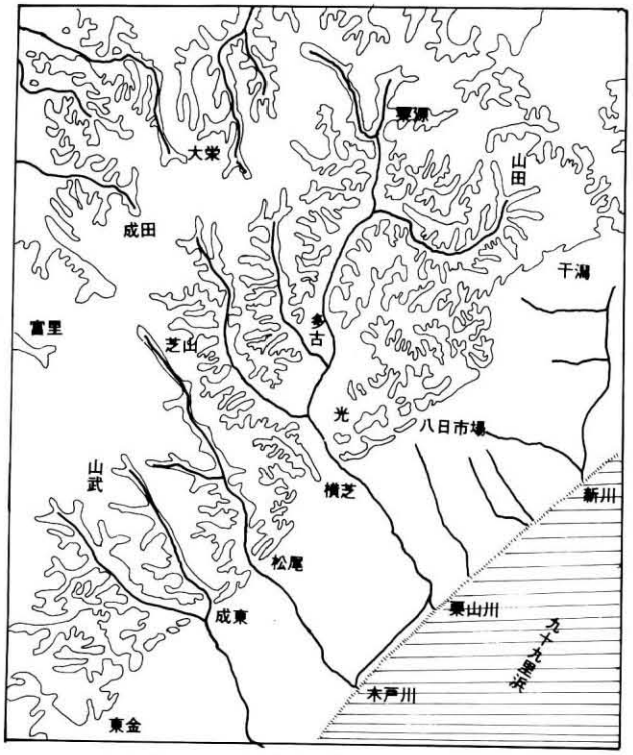
Ⅰ　古代遺跡の概観

自然的環境　両総の国境を貫流する栗山川は、香取地方の山間部に発し、多古川・借当川・高谷川などの支流をあつめて、九十九里浜に注いでいます。その流路は約32kmで、上中流部では小支流が下総台地を樹枝状に開析し、その浸蝕谷群は、肥沃な渓谷平野を形成しています。

この栗山川に沿って、南北に細長く展開する横芝町は、海の幸・山の幸にも恵まれるため、古代以来の多くの歴史的遺産を有する地域で、特に北部の丘陵上には多数の古代遺跡が存在しています。豊かな古代文化を産み育てた北部丘陵の一帯は、九十九里平野と下総台地の接点であり、台地を刻む谷は南側の太平洋側からではなく、栗山川に合流する大きな谷が北東方面から樹枝状に入りこんでいます。

古代遺跡が展開する丘陵は、関東ローム層（東部下位ローム台地）に属する起伏量50m以下の下総台地で、段丘面はゆるく北西に傾斜しています。その地質構造は、主に洪積世の成田層群（下部）と、第3紀鮮新世の凝灰質頁岩と砂岩の互層（東金層）の交差する地域であるといわれています。

貝塚と古墳群　横芝町に所在する古代遺跡は、縄文・古墳時代を中心として約50件にも及びますが、特に縄文期遺跡は発掘例が多く、昭和29年以降、慶応義塾大学考古学研究室の清水潤三教授を中心に、牛熊貝塚・鴻ノ巣貝塚・姥山貝塚・高谷川遺跡などの調査研究が進められました。中でも姥山貝塚は、昭和31年3月以来、発掘調査は5次を数え、姥山Ⅱ式の晩期縄文式土器に関する研究など、多くの学術的成果を収めました。また、低湿地からの独木舟・櫂などの出土例も多く、河川や湖沼・小支谷が現在よりも広く展開した縄文時代にあって、重要な交通機関として利用されたものと考えられます。



九十九里地方の台地と河川

また、木戸台・町原・中台・取立など、武社国造期の古墳群も多く、現在、中台・町原・寺方の3群で約43基の古墳が保存されてい

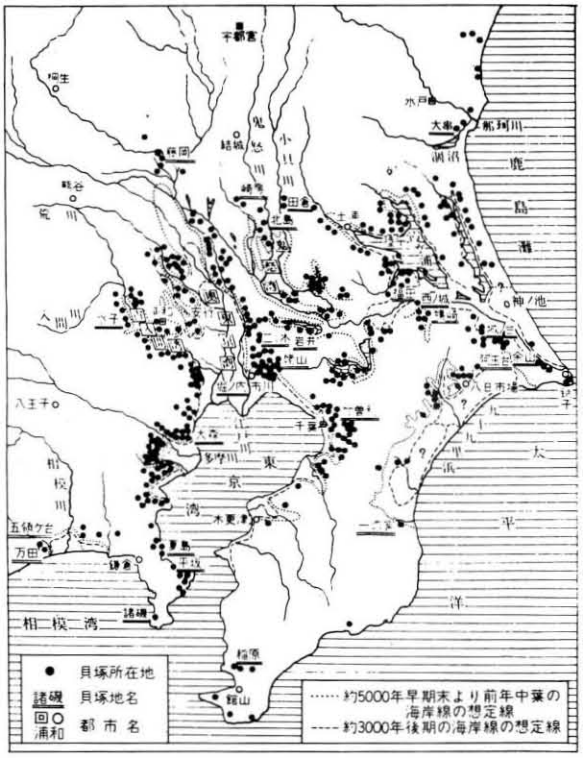
ます。特に中台古墳群は、殿塚・姫塚を中心に前方後円墳２基・円墳18基を数え、昭和31年春、早稲田大学考古学研究室の滝口宏教授を中心とする調査団によって発掘調査が実施されました。その結果、姫塚古墳からは古代の葬送を模した埴輪列が完全出土し、考古学界の注目するところとなり、後に国の史跡に指定されました。

以上、横芝町に分布する古代遺跡を概観してきましたが、古墳時代の遺跡は未調査のものが多く、その調査・整備・保全の対策がすすむ中で、当地方の古代史研究も一層深化するものと期待されています。

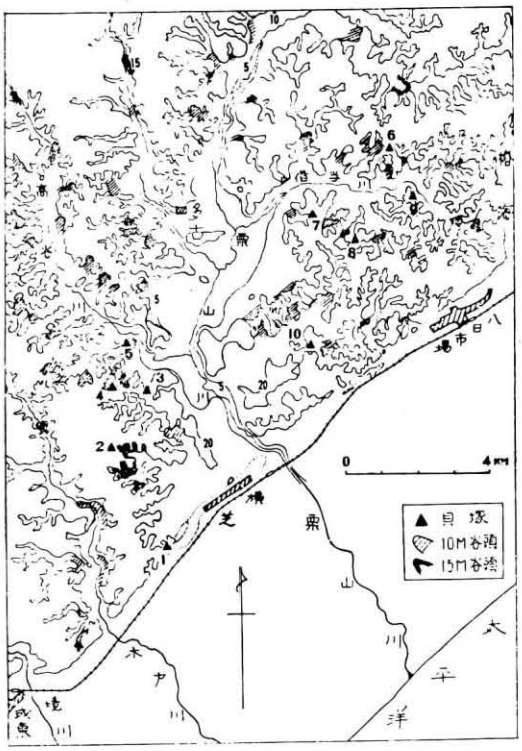
Ⅱ　縄文人の食生活

郷土の縄文遺跡　下総台地を刻む栗山川渓谷は、谷内の標高は著しく低く、５ｍ等高線は遠く多古町地方にまで溯り、原始時代には海水の浸入をみて複雑な海岸線をもった奥深い海湾であったと考えられます。洪積台地の周辺にひろがる遠浅で波静かな入江の海は、貝と魚の宝庫でした。そのような海の幸を意欲的に利用し、土器をはじめとする道具や生活技術を創造して、縄文時代の文化が起こったのです。

当時の海湾の汀線に沿って、貝塚などの縄文遺跡が分布するわけですが、昭和48年度の調査によると、横芝地方の縄文遺跡は42か所（貝塚11・遺物出土地５・散布地11・包含層４）を数え、県下でも有数の遺跡地帯を形成しています。これらの遺跡群は早くから注目され、青木謹爾・鈴木正隆・鋸田欣治・清水浦次郎などの諸先学が調査をすすめ、昭和30年代以降、清水潤三・鈴木公雄両氏を中心とする慶応義塾大学の学習調査が実施され、ひろく学界に報告されました。代表的なものとしては、牛熊貝塚・鴻ノ巣貝塚・姥山貝塚の３遺跡があげられます。いずれも5000～3000年前の縄文遺跡ですが、特に姥山貝塚からの出土品は質量ともにすぐれ、現在、鈴木公雄氏によって晩期縄文式土器の比較研究が進められています。今後の地域研究の中



縄文時代の海岸線（原図・江坂輝弥氏）



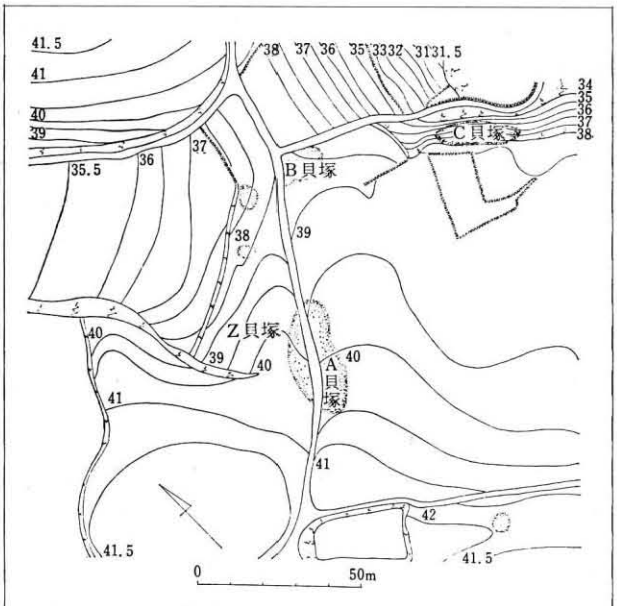
1 猿尾　2 姥山　3 木戸台　4 鴻ノ巣
5 牛熊　6 飯高　7 宿井下　8 八辺
9 大浦　10 貝塚
(清水潤三氏「千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究」による。)

で、さらに新しい遺跡の発見が注目されています。

貝塚の遺跡と遺物

〔1〕姥山貝塚（中・後・晩期）は栗山川渓谷の谷口近く、その右岸小支谷の最奥に近い丘陵上にあって、谷口からやく1.5km、谷の標高は出口付近で10m、貝塚脚下では15m程度を測ります。この姥山貝塚は、栗山川渓谷の貝塚の中で最も規模の大きいもので、7～8個の貝塚によって形成されています。

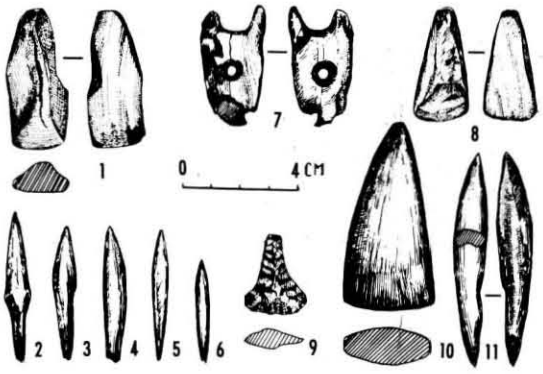
①A地点貝塚　丘陵の中央部に位置して、貝殻の散布は最も広く、厚さ20cm内外の黒色表土層下に50～60cmの混土貝層と30cm余の貝塚下土層があって、加曽利E式・阿玉台式の土器が出土しました。貝類はチョウセンハマグリが主体で、アサリ・ダンベイキシャゴがこれに次ぎ、シジミもかなりの広範囲に認められています。



姥山貝塚実測図

②C地点貝塚　急崖に直面する台地上に帯状に分布、約20度の傾斜をもつ斜面貝塚で、なお台上平坦部にも貝塚が存在したものと推定されています。貝層の構成は3層から成り、堀之内式・加曽利E式・阿玉台式の土器を出土しました。貝類はダンベイキシャゴを主体とし、大形カキ・ハマグリを混じ、最大層にはシジミを包含しており、魚骨については外洋魚類が乏しいといわれます。

③Z地点貝塚　貝層は50cm内外で表土下の黒褐色土層（30～40cm）から安行式（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ各型式）を主体とする土器を出土し、これに相当



貝塚出土の石器と骨角器

①牙斧（鴻ノ巣）
②～⑥骨角製尖頭器（鴻ノ巣）
⑦⑧猪牙製品・牙斧（姥山）
⑨⑪篦状石器・骨製尖頭器（八辺）
⑩小形石斧（牛熊）
〈原図・清水潤三氏〉

量の千網式土器を混じています。貝類はハマグリ・ダンベイキシャゴを多量に含み、魚骨は外洋性の種類に乏しく、反面、獣骨は豊富であって、骨製品中スズキの頬骨に１～２個の小孔を穿ったものが２点出土しています。

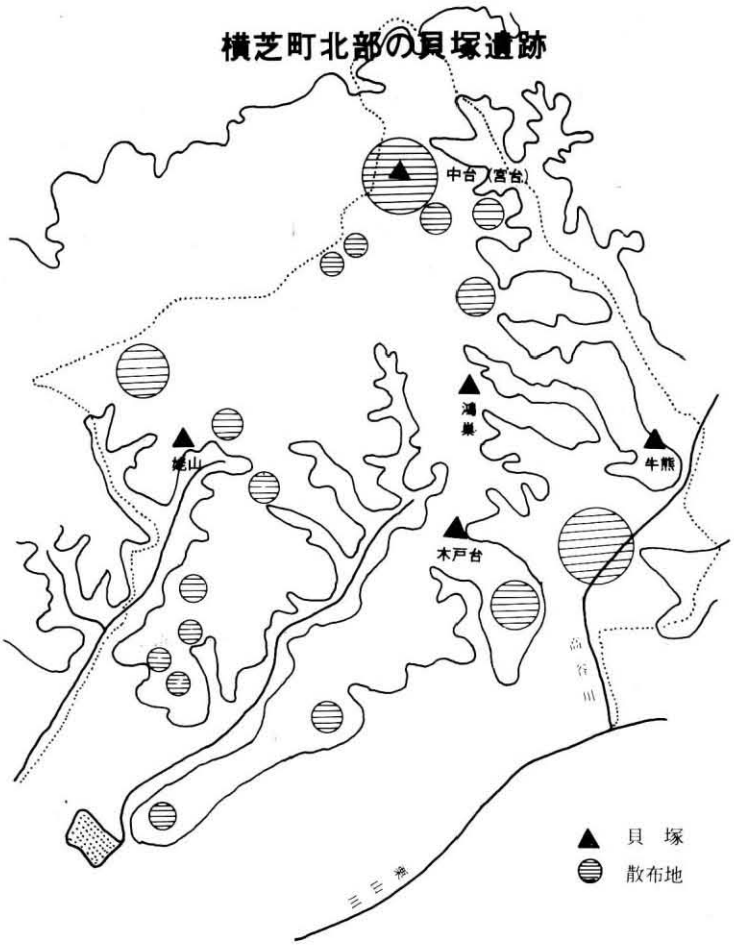
〔２〕鴻ノ巣貝塚（中・後）は、栗山川の支流である高谷川渓谷の左岸、中台部落の谷に近く牛熊の丘陵の東側に深く入りこんだ小支谷の奥に位置していますが、この貝塚は北向きの小さな斜面貝塚です。貝層は厚さ65～80cmで２層から成り、出土遺物は堀之内式土器が主体で、貝類はハマグリ・シジミが多く、魚類はタイ・スズキが中心であったといわれます。獣骨も比較的豊富でイノシシが最も多く、シカ・サル・タヌキがこれに次ぎ、骨製品としては骨鏃および尖頭器類が５点ほど出土しました。

〔３〕牛熊貝塚（後期）は、牛熊丘陵の突端に近い北西斜面に位置し、貝塚は約30度の急傾斜をなして混土貝層60cm・灰層５cm・混土貝層40～50cm・褐色土層20cmの層序を形成、加曽利Ｂ式・安行Ⅰ式・同Ⅱ式の遺物を出土しました。貝類はチョウセンハマグリが主体で、ダンベイキシャゴが多く、シジミ・マツカサガイが少量認められました。獣骨類は豊富で、魚類にはスズキが最も多く、一部に大型海獣の顎骨などが認められ、獣類ではシカが多くイヌ・タヌキ・サルなどがありました。また骨角器としては骨鏃・尖頭器類や浮袋の口などが発見されています。

縄文人の食糧　波静かな入江の海と、台地をおおう照葉樹林は、そこに住む縄文人たちの漁撈・狩猟・採集活動に豊かな獲物を提供してきました。貝塚は共同体（集落）の「ゴミ捨て場」の跡であり、多くは食用に供した貝殻の積ったものです。また、加曽利貝塚など東京湾岸の大型貝塚は、山国の毛皮・石材などと物々交換するための干貝を作った加工場の跡だとする研究者もいます。いずれにしても、貝塚を発掘調査することにより、当時の食料や土器などの道具について知ることができます。今までの学術調査の成果を整理してみますと、横芝地方の縄文人は次のような食糧を採取していたようです。

貝類……チョウセンハマグリ・ハマグリ・ダンベイキシャゴ・アサリ
　　カキ・マツカサガイ
魚類……クロダイ・タイ・スズキ

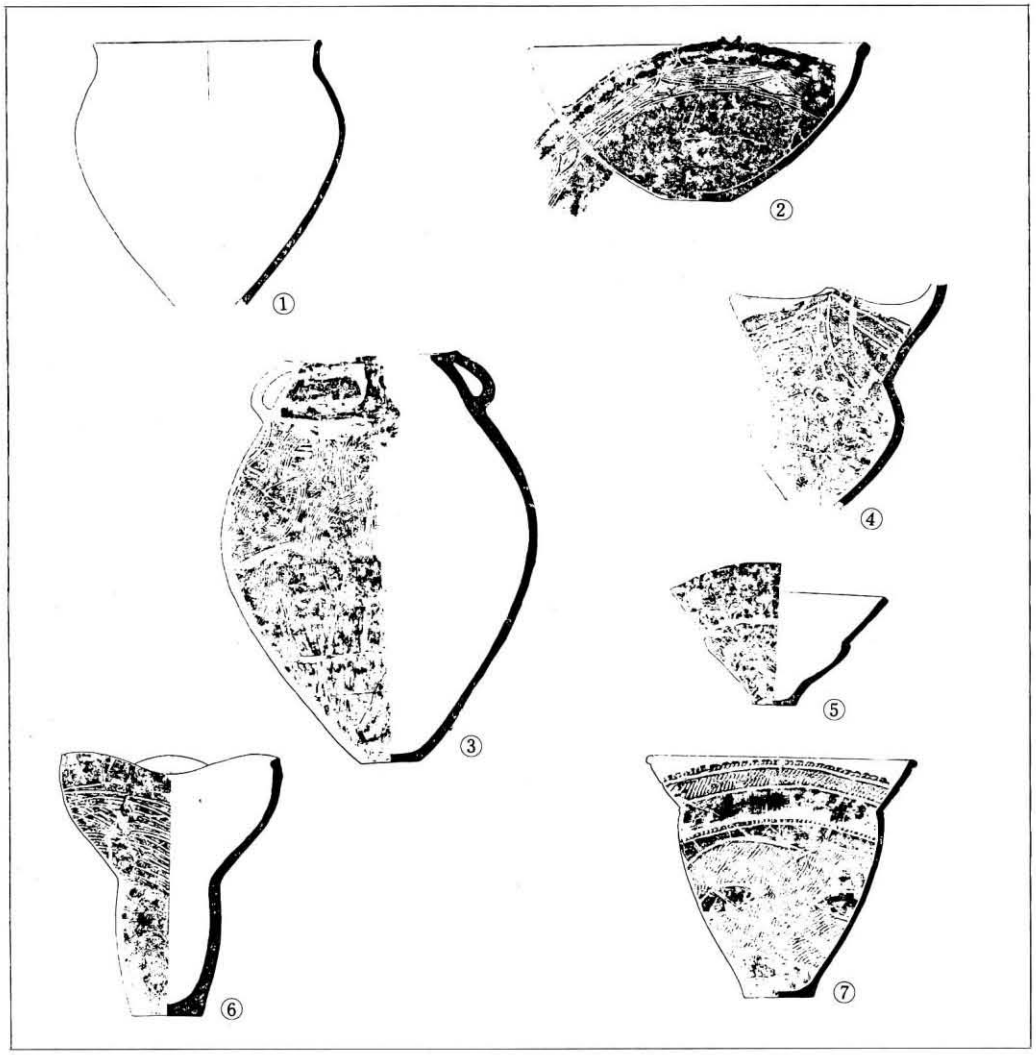
横芝町北部の貝塚遺跡



獣類------イノシシ・シカ・サル・タヌキ・イヌ・ウサギ・アナグマ

牛熊・姥山などの加曽利Ｂ式の遺跡は獣魚骨を大量に出土し、魚類はクロダイ・スズキが圧倒的に多く、その漁撈は栗山川渓谷内において行われ、外洋へはあまり進出しなかったものと考えられます。貝塚からの出土物からは、縄文人の食糧は「動物食」が中心であったものと思われますが、けれども主体はドングリ・トチ・クルミなど「植物食」であったといわれ、各地の遺跡で堅果類・パン状炭化物など植物の遺存体が発見されています。

縄文土器と食生活　日本列島で土器の使用が始まったのは、約１万年前といわれ、古代人の食生活に大きな変化を与えました。縄文期以前の調理法としては、生食・炙焼（あぶりやき）・蒸焼（むしやき）などが考えられますが、土器の使用によって烹煮（ほうしゃ）という調理法が加わったのです。「煮る」ことによって、食料、とりわけ澱粉質・繊維質の消化吸収が促進され、温かい汁をともなった衛生的な食事が可能となりました。このことは、縄文時代に



〈土器型式〉　①千網式土器（姥山）　②千網式土器（姥山Ｚ）　③堀之内式土器（鴻ノ巣）　④堀之内式土器（鴻ノ巣）　⑤堀之内式土器（姥山）　⑥加曽利Ｂ式土器（牛熊）　⑦加曽利Ｂ式土器（牛熊）

おいては植物が基礎的な食糧で、それを簡便に煮て食べる点にこそ、土器普及の要因があったことを示唆しています。

縄文土器は、その機能からみて、基本的には次の３形態に区分することができます。

煮沸形態……魚貝や木の実などの食糧を煮炊きする、底の小さな薄手の深鉢形。

貯蔵形態……食糧や飲み水を貯えるための、底が大きく安定した大型の深鉢形。

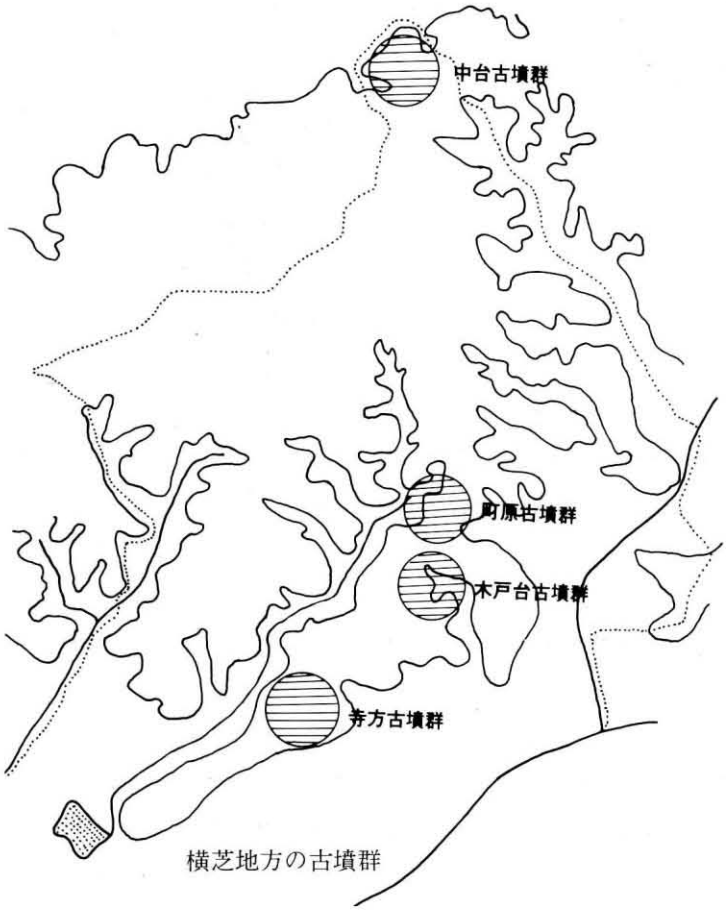
盛付形態……食物を盛りつけたり、祭祀の際に献供するための、浅鉢形・皿形や注口形。

縄文土器の形は、時期や地方によって、それぞれ多様な特徴をもっていますが、この基本的な形態は縄文時代を通じて変化がありません。これは縄文土器が当時の必需品として、生活の機能と密着していたことを物語っています。

Ⅲ　殿塚・姫塚の遺産

古墳文化の開幕　稲作農耕を中心とする弥生文化の円熟は、原始共同体である村落の内部に身分的な階級を発生させ、各地の村々には「豪族」が割拠するようになりました。その豪族たちを統合する大豪族は、大和の朝廷から「国造」に任命され、いわゆる「古墳文化」の時代が始まるのです。ひとびとは古墳の縁辺に無数の埴輪を並べ、古墳の被葬者である族長の霊魂を弔いました。円筒埴輪から家形埴輪、あるいは動物や人物の埴輪など、その素朴な表情とさまざまな配列の埴輪群から古代人の生と死の祭りの声が聞こえてくるようです。

川戸彰氏の研究によれば、950基をこえる山武郡市の古墳のうち80%近くが郡北台地に集中しているといわれ、中でも芝山古墳群は最大のものです。横芝地方の古墳群としては、中台（前方後円墳２・円墳18）木戸台・町原（前方後円墳１・円墳11）、寺方（前方後円墳３・円墳23）の３群ですが、そのうち寺方古墳群は梅林造成のために大規模な破壊がありました。

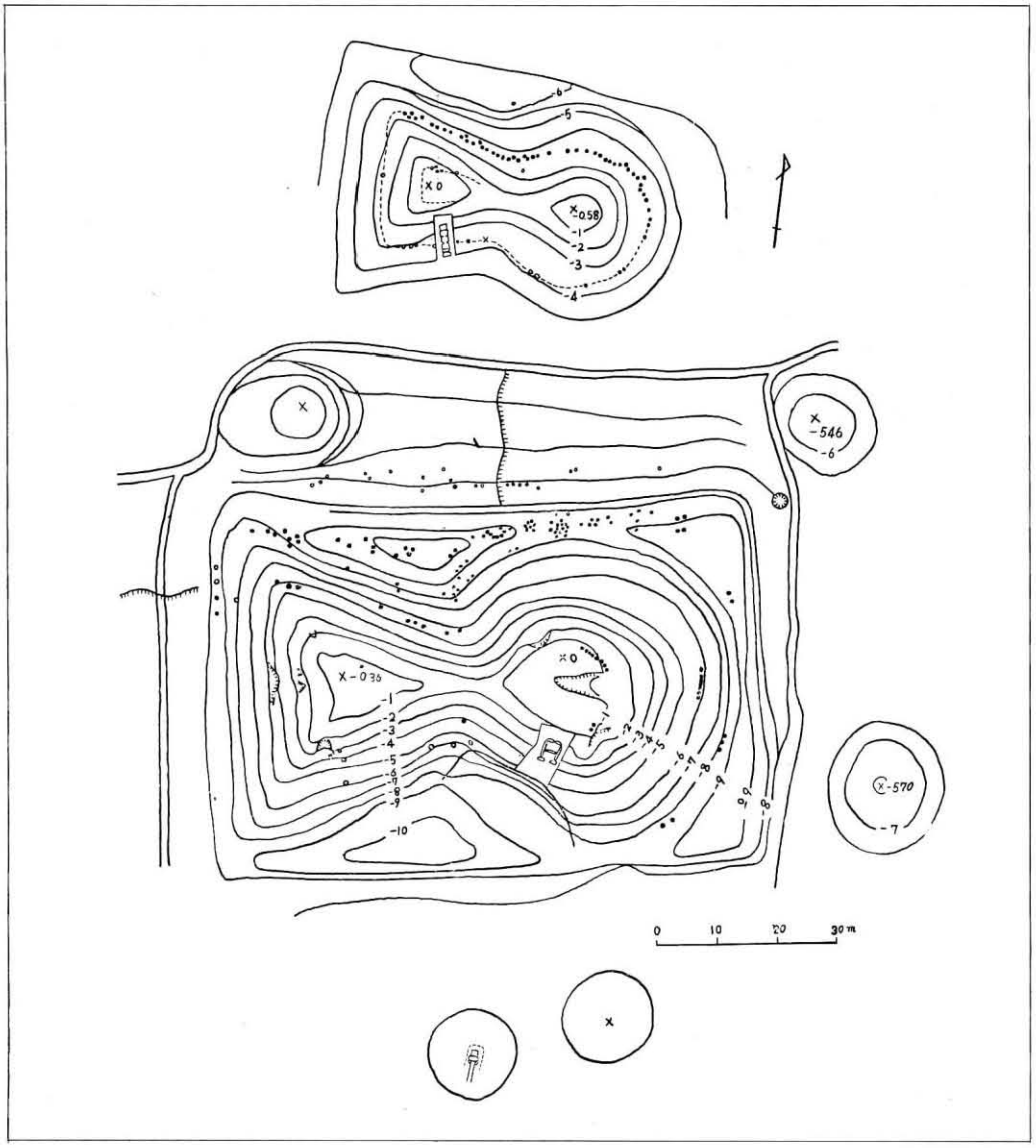


横芝地方の古墳群

現在、前方後円墳４・円墳34・経塚３など、総数43基が保存されていますが、特に中台古墳群の殿塚・姫塚は多数の埴輪を出出土して全国的にも有名な古墳となりました。

埴輪芸術の誕生　芝山古墳群の支群を形成する殿塚・姫塚（国史跡）は、ともに６世紀の築造と推定されており、昭和31年、早稲田大学の滝口宏教授によって発掘調査され、すぐれた学術的成果をあげて注目されました。

殿塚古墳は全長86m・比高８mの前方後円墳で、周囲に長方形の濠を二重にめぐらした雄大なものです。内部主体は、後円部に板石を立てて造った横穴式

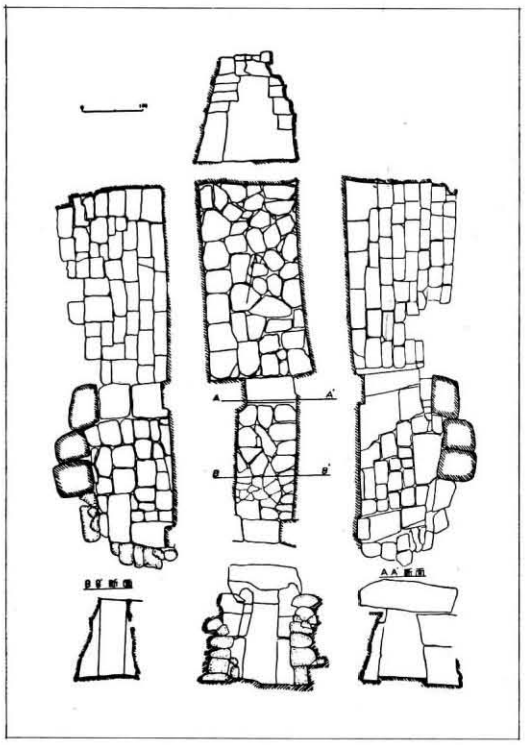


殿塚・姫塚古墳実測図（鈴木喜久二・中村繁治　1956）

石室が設けられていました。副葬品としては大形の勾玉・ガラス玉・琥珀玉・耳環・頭椎太刀・直刀・刀子・鉄鏃・銅鋺・金銅鈴など多数が出土しました。墳丘の上の80個を越える埴輪は、男女・馬・器財など、その種類の豊富なことは比類のないものでした。

隣接する姫塚古墳は、全長58m・比高6mの周溝をもった前方後円墳で、前方部に埋葬施設があり、副葬品には殿塚にはみられないみやびやかさが加味されていました。玄室部からは玉・耳環などの装身具や馬具、羨道部からは直刀・玉・須恵器が出土し、副葬品全体としては勾玉・切子玉・ガラス玉耳環・馬具・鉄鏃・刀子・須恵器・方頭太刀などが発見されました。

姫塚の墳丘中段には、人物を主体とする多数の形象埴輪がめぐらされていて、約50mにわた



姫塚石室実測図　（鈴木・中村）

り当時の葬送の行列を展開していました。出土した埴輪は総数44個で、その配列は先頭集団に馬と人物が一緒に立ち、人物については日笠風の帽子をかぶり筒袖の上衣をきて、腰に鎌を差しているので農夫の馬子と推定されています。馬は飾り馬が主体で、その次に盛装した男子像数体が並び、さらに盛装した女子像数体が続いています。その後方には家形埴輪が二軒たち、さらに庶民と思われる女子像数体と男子像の列が続き、族長の遺骸の運搬を中心に葬送関係者の行列を描いたものと考えられます。また、ひざまずき両手をついた農夫像や、琴を膝においた男子像など、土の中からにじみ出る庶民的な感情がリアルに表現されています。

「葬送の列」とよぶと、悲しみの心が表現されることになりますが、この埴輪列の群像こそ古代人の生活環境と世界観を象徴的に表現している芸術的世界であると考えられます。この埴輪の行列に囲まれた古墳の被葬者は誰か――おそらく武社の国造に連なる地方豪族であろうと推定されています。武射地方における国造族の奥津城（墳墓）としては、松尾町の北方に所在する旭ヶ岡古墳・権現塚古墳など、木戸川上流の地域が最も有力であるといわれ、殿塚・姫塚もその系列とみるべき位置を占めています。郷土地方を支配した武社国造とは、一体どのような氏族であったでしょうか。

武社の国造　平安初期（９世紀初頭）の撰録になるといわれる『先代旧事本紀』第10巻の「国造本紀」によれば、成務天皇（４世紀末）の時代に須恵・馬来田（まくた）・上海上（かみつうなかみ）・伊甚（いじみ）・武社（むさ）・菊間（きくま）・阿波（あわ）の国造が置かれたとあり、大和朝延の房総経営の拠点とされました。さらに応神天皇（５世紀）の時代には、印波（いんば）・下海上（しもつうなかみ）・長狭（ながさ）・千葉の国造が加えられ、古代房総地方の在地豪族の中から有力者が地方官に任命されたのです。それぞれの国造は一定の支配圏を保持していたわけですが、石井則孝氏は各国造の治定範囲をつぎのように想定されています。

①須 恵 国 造…富津市を流れる小糸川流域の飯野古墳の一帯（内裏塚古墳・九条塚古墳）

②馬来田国造…木更津市の小櫃川下流域の長須賀古墳群（大塚古墳・丸山古墳・菅生遺跡）

③上海上国造…市原市の養老川流域の姉ヶ崎古墳群（二子塚古墳・山王山古墳）

④伊 甚 国 造…夷隅郡大多喜町を流れる夷隅川から長生郡一宮町の一宮川流域までの範囲（下大多喜古墳・台古墳群・大宮氏旧宅裏山古墳）

⑤武 社 国 造…山武郡松尾町の木戸川流域の大堤古墳群（権現塚・蕪木5号墳）

⑥菊 間 国 造…市原市の養老川以北から村田川以南にかけての範囲（東関山古墳・向原古墳）

⑦阿 波 国 造…館山湾に流入する平群川流域（横穴古墳が主体）

⑧印 波 国 造…成田市の旧公津村（天王塚古墳・船塚古墳）

⑨下海上国造…香取郡小見川町の全域と海上郡・匝瑳郡の一部を含めた地域（城山古墳群）

⑩長 狭 国 造…加茂川流域の鴨川市を中心とした地域（広場1号墳）

⑪千 葉 国 造…比較的広い範囲と推定され、都川流域から南は村田川流域にいたる範囲と考えられている（七廻塚古墳・中原古墳群）

さて、⑤の武社国造ですが、『国造本紀』には「武社国造。志賀高穴穂朝。和邇臣祖彦意邪都命孫彦忍人命定$_2$賜国造$_1$」とあります。成務天皇の世に彦忍人命が武社国造に任命され、木戸川・栗山川の流域地方を支配地として、和邇（わに）の一族である牟邪臣（むさのおみ）が活躍したものと推定され、芝山町の宮門神社は和邇神（彦忍人命）を祭神としています。また角川源義氏の研究によれば、和邇氏族は入江のある水系を掌握してたつといわれ、九十九里最大の規模をもつ栗山川渓谷の入江が武社国造（牟邪臣）とその部民たちの生活拠点となった可能性は大きいといえます。芝山古墳群が武社国の中央部を形成していたと推定され、殿塚・姫塚古墳の被葬者は、やはり武社国造の系譜に連なる古代村落の族長層であったものと考えられます。

参考文献（『』単行本・「」学術雑誌）

清水潤三・千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究（予報）「史学」31の4

清水潤三・高谷川遺跡『日本考古学年報』7・木戸台貝塚『同年報』12・鴻ノ巣貝塚『同年報』15・千葉県横芝町発見の磨製石剣「考古学雑誌」52の3

鈴木公雄・千葉県山武郡横芝町姥山貝塚の晩期縄文式土器について「史学」36の1

川戸　彰・東上総山武地方における石器時代遺物について「上代文化」20

川戸　彰・武射国造と古墳「社会科通信」20・再び山武地方の古墳について「房総史学」6

鈴木喜久治・中村繁治・千葉県芝山古墳群殿塚第7号墳発掘略報「古代」19・20合併号

滝口　広・久地岡榛雄・『はにわ』日本経済新聞社・1963

石井則孝・『古代房総文化の謎』新人物往来社・1977

あ と が き

町教育委員会では、住民の皆さんに郷土社会の歴史的伝統や文代財を紹介するために、『文化財図録』の編集を進めて参りました。この度、その第１集として、縄文貝塚と武射国造期古墳からの出土品の紹介を中心に〈古代史の遺産〉を公刊することになりました。この図録が、郷土地域の考古学入門へのテキストともなれば、編集子にとりましてこれに過ぎる喜びはありません。

終りに、図録を公刊するに際して、御協力を頂きました慶応義塾大学考古学研究室・芝山はにわ博物館・山武考古学研究会等、関係機関の皆様に厚く御礼を申し上げます。

また、企画構成・原稿校閲等、終始御指導を頂いた上堺小学校々長の藤代弘一先生、郷土学習に関する玉稿を賜わりました横芝中学校の山辺百代先生、文化財審議会々長の土屋源吾氏など、諸学の方々に深く感謝申し上げます。

昭和54年５月５日

文化財図録編集委員会

（文責・伊藤一男）

昭和54年5月5日

文化財図録・古代史の遺産

編集・発行　横芝町教育委員会

印　刷　所　山武印刷株式会社